
ケサランパサラン

昼寝日和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ケサランパサラン

【Nコード】

N3111M

【作者名】

昼寝日和

【あらすじ】

ケサランパサラン。

白い毛玉のような物体で、空中をフラフラと飛んでいると言われる。穴の開いた桐の箱の中でおしろいを与えることで飼育でき、増殖したり持ち主に幸運を呼んだりするといわれている。

（前書き）

ケサランパサラン。

白い毛玉のような物体で、空中をフラフラと飛んでいると言われる。穴の開いた桐の箱の中でおしるいを与えることで飼育でき、増殖したり持ち主に幸運を呼んだりするといわれている。

風がひととき強く吹いた。

枯れた葉が舞い、髪がおもいきり乱れ、私はスカートの裾を軽く押さえる。

パラパラと風に流されていく葉のなかにふと、白いわたげのようなものが交じっていることに気がついた。

ウサギのしっぽくらいの大きさのそれは、日光に照らされ、時折刺すようにきらりと光る。サイズさえもつと小さければ、何かの植物のわたげなんだとすんなり思うことができたのだろうが、私にはそれがわたげというよりもわたげこりに思えてしまった。

この街、汚れてる。

遊歩道をぬけるとがらんとした空間に出る。この公園の中央広場だ。私は隅に設置されているベンチの一つに腰を掛けた。鞆からお気に入りの作家の本を取り出すと表紙のカバーの絵を軽く指でなぞる。

ああ、違うのかな。

汚れているのはこの街ではなく、白光するわたげこりを見て『汚れてる』と勝手に認識してしまう私の方か。

深く息を吐くと、白いもやがふわっと広がる。人がまばらにしかない公園のベンチに一人。挟んだしおりを探しながら、こんな風に読書でもしていれば誰かと待ち合わせでもしているように見えるのだろうか、などと思いをめぐらす。

空が広がり、深みのあるブルーに染まっていた。おかげでこんなに日が照っているのに、かなり寒々しい。この青空が、乾燥しきっている空気と切れるくらいに冷たい風を強調してしまっているのだ。早々に手がかじかんでくる。

風が我が子をあやすように鳴き、枯葉がぱさぱさと落ちてくる。風に吹かれた白く大きいわたげこりが私の頬にまわりついてきた。

うっとおしいので軽く手で払い、ついでにマフラーの位置を直す。

手、痛い。

首筋や膝が寒いのならマフラーや膝掛けを使えばいい。しかし本を読んでいるため、どんなに手がかじかんでも手袋を使うわけにはいかなかった。ページを上手くめくれなくなってしまうからだ。

手に息を吹きかけていると、さっき払ったばかりなのにまたわたばこりが頬に触れてくる。あまりにもうっとおしくて、思わず驚づかみにすると、それはほんのり温かった。

訝しく思い、まじまじと手の中にあるものを見る。わたばこりと目が合った、ような気がした。

馬鹿馬鹿しい。

ただのわたばこりと目が合うだなんて。

わたばこりは私の手の中でキョトンとしているようにも見える。いやいや、キョトンも何もない。あるわけがない。

私は手の中のわたばこりを放った。ふわっと空中に舞い、風に吹かれて飛んでゆく。

私は本を閉じ鞆にしまう。予想以上の寒さと、うっとおしいわたばこりに根負けしてしまったのだ。どこかゆっくりとくつろげる店に入って熱いコーヒーを飲もう。そこで読書をしよう。溜息一つして私は立ち上がった。

犬が飼いたい、と言ったのは私だ。ちゃんと面倒見るから、散歩は私がするから、と確かに言った。そうです、言いましたとも。だっ

てそう言う以外ないじゃないですか。思わず拾ってきてしまった子犬を、あったところに戻してきなさいと怒鳴られ、どうして必死になって守らないでいられましょう？

早朝、えーえむ四時半。私はまだ真新しさの残る犬用リードを握り、子犬と歩け歩け時々走れ大会を催していた。

わんわんわん、ああはいはいお散歩うれしね。

あくびをかみころしつつふるえながら、はしゃぐ子犬と歩く。多少は仕方ないとは思うけど、こんな朝っぱらからきゃんきゃん吠えさせていいのかな…。

ラッキー、と呼びかけてみる。それが自分のことだと理解してないらしく子犬は私を完全に無視し吠え続ける。

くそう…なにがラッキー（幸運）だ。

まるでラッキーが呼び寄せたかのように風が強く吹いた。ジャージを貫いて冷たい風が私の身体に突き刺さる。

「寒いんですけどおー」ともらす私。

ワウンキュウウー、となぜかわめくラッキー。

「なによー、あんたのためにわざわざ散歩してやってんでしょー？

何か文句あるわけえ？」

「クーン」

ラッキーが立ち止まり、振り向いて私を見上げた。くそう、かわいいぞ、お前。

朝日が空を照らしはじめた。冷たい風に乗って白光するわたばこりが一つ、飛んでいった。

わたばこりってどうしてこんなに気になるんだろう。

冬の廊下はひんやりとしていて、お掃除の時間は特に寒い。でも私はほっきの係りだからまだまし。ぞうきんの係りの人は大変だ。手がじんと溶けだしてしまうくらいに冷たい水でぞうきんをぬらし、しぼり、お掃除が終わったら今度はそれをきれいにすすがなくてはならない。

私がほうきでほこりを掃く。するとその掃いたところだけをぞうきんの係りの三人が拭いてゆく。

廊下に這いつくばってもくもくとぞうきんを動かす三人の、小さく震える唇からは弱々しい声が漏れている。小さな訴えを含んだ声は、冷たい空気の中にふわりと浮かんでは消えてゆく。

手が赤いよ。痛い。まだ終わんないよ。はやく、はやくしようよ。はやく終えてしまおうよ。

「あつ」

ひとかたまりになっていたわたばこりがふわっと宙に舞った。雑に掃きすぎたのだろうか？

ぞうきんの係りの人たちはみんな廊下に立てひざになっていて、舞うわたばこりをぼんやりと眺めている。みんな寒すぎてぼうつとしているようだった。

コーヒーがまずいと泣きなくなる。

これだったらコーヒーじゃなくてただのお湯を飲んだほうがまだましだ。

それとも、椅子があまり、屋根があり、暖房が入っているというだけで満足するべきなの？

ため息を吐く。吐き出した息は特に白くなることもなく、私を取り巻く空気の中に溶け込んでいった。

本の続きを読もうと鞆を開く。するとふわりとわたぼこりが飛び出してきた。わたぼこりは私を見てうれしそうに笑った、ように見えた。

さっきの…。

さっきのわたぼこ…いや違う。そんなわけがない。

無意識にコーヒーを一口する。まずい。

「このコーヒー、もっとおいしければいいのに」

何かを取り繕うように、でも何も取り繕えずに、少し錯乱しながら言葉をもらす。と。

いきなり雷鳴が響いた。驚いて窓の外を眺め、大雨が降りだしたのを見て、舌打ち。

雨具なんて持ってないのに。

今日何度目かのため息を吐き、今度こそ鞆から本を取り出す。

もういいや。雨が止むまで読書をしてやり過ごそう。

どうせにわか雨だろうし。気を取り直してコーヒーに口をつける。

「ん？」

いつの間にやらわたぼこりはいなくなってしまった。でも、いつの間にやらわたぼこりのことなどすっかり忘れてしまった私は、突然美味しく感じられたコーヒーに首を捻りつつ、手にした本のカバーをにらみつけた。

ラッキーが外を見て切なげな声を出した。

「しょーがないでしょー？雨降ってんだから」

窓際に座るラッキーの隣に私も腰を下ろす。

ただでさえ寒いのに、窓際：しかも今日のように雨降りの日の窓際はかなり冷える。

「さつむー。あんた、よく平気だよな？その毛皮のせいなの？」

キュウン？ラッキーがつぶらな瞳でキョトンと私を見上げた。

くっそー。どうしてこいつ、こんなに上手に首を傾げることができ
るんだ！

「お前ほんとかわいいなあ、このこのっ」

両手でラッキーの顔をもみくちやにする。喜んでいるのか、うつと
うしがっているのか。ラッキーはキュウンキュウンと喚いている。

「そんなに散歩したいの？残念だけど、雨降ってるから、きょーは
むーりーなーのっ」

「キュウウ、ワウ、キューンキュウ」

ラッキーの背中の中よりからするりとわたぼこりのようなものが舞っ
た。毛玉かな、と思い右手でパシッと掴む。ティッシュにくるんで
捨てようと、開いた手の中には何も無い。

「あれ？」

掴み損ねたかな、と首を傾げるとラッキーも一緒になってキュウン
？と首を傾げる。それからふいと外を見て、かなりうれしそうにし
っぱを振ってワンと吠えるラッキー君。しあわせもの

日光が窓から差し込んできた。誰も頼んでないのに照明のつまみを
くいつと回したときのように、ふわっと部屋が明るくなる。

「雨、降らないかな」

一番右端のぞうきんの係りの人が言った。

「あー、次の授業の体育、外かあ」

一番左端のぞうきんの係りの人が言った。

「でも、すっごい晴れてるよ」

真ん中のぞうきんの係りの人が言った。

テルテルボーズ逆さにつるす？ 間に合わないよ。

先生逆さにつるす？ 誰がするの？

大きなわたばこりが、小さく開いた窓から外へ飛んでゆく。

「はやく掃除しちやおうよ」

私はわたばこりを見ながら言った。ぞうきんの係りの三人も風に吹かれるわたばこりをぼんやりと眺める。

そうだねそうしよう、手が赤いよ、痛い本当に痛いよなどと口々に言い、掃除を再開した。

ウサギのしっぽくらいの、白いわたげのようなものが、校内に植えてあるびわの木にひっかかっている。嫌味なくらいきれいに晴れている空の下、嫌味にしか見えない上下長袖のジャージを着た先生の指示で整列する私たち。びわの木のわたげもどきを見るともなしに見ながら、テルテルボーズの逆さづくりくらいならやっておいてもよかったかもしれない、などと後悔する。

先生つるし上げられた？ 誰に？ 奥さんかな？

話し声に振り向くと、さっきのぞうきんの係りの三人だった。まだ赤くなっている手に白い息を吹きかけながら楽しげに話している。半そで半ずぼんの体操着姿で震えつつ、先生の指示に従って体操隊

形に広がった。おでこにバンソウコーをはった先生が笛をくわえる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3111m/>

ケサランパサラン

2011年2月3日02時31分発行